

【特集：中国近代史にみる中央と地方】

# 1930年代重慶における銀行設立ブームと 「銀行業界」の形成\*

林 幸司

【キーワード】 銀行、同業者組織、金融恐慌  
【JEL 分類番号】 G21、N15

## 1. はじめに

中国西南内陸部に位置する四川地方では、古くより商業都市重慶を中心とする交易が盛んにおこなわれ、これに付随して銭荘などの伝統的金融機関や、遠隔地貿易に従事した商号などが、為替取引や通貨兌換に従事していた。1920年代以降、西洋の制度を取り入れた「銀行」が相継いで設立された。ここにおいて、重慶では「銀行業界」が形成されていくこととなる。

重慶で銀行設立ブームが起こった頃の四川地方は、二つの点で大きな転換点を迎えようとしていた。まず政治的には、地方軍事政権による地域的支配が、新たに中央政府としての位置を確立しつつあった南京国民政府の一地方として組み入れられる時期にあった。また経済的には、金融恐慌を経て、地域的かつ重層的な通貨流通制度が、国家的通貨体制へ統合されつつあった。

このように、「中央」と「地方」の関係が大きく変動しつつあった四川地方において、それまで築かれていた独自の地域的関係はどのように変動したのであろうか。本稿では、四川地方における商業の中心であった重慶における「銀行業界」の形成を事例として、従来政治・軍事の

側面から論じられがちであった<sup>1</sup>、地域社会における秩序変動のありかたについて、検討することとしたい。

## 2. 重慶における経済状況

### 2.1 商業取引構造の具体例：「山貨」「上貨」の取引

重慶の経済は、「山貨」の輸出と「上貨」の輸入という両輪によって動いていたといわれる。古来「天富之國」といわれるほど物産が豊富であった四川地方では、穀物や塩・アヘンなどのほかに、豚毛・桐油・生糸・漢方薬種・牛革・羊皮など、「山貨」と呼ばれる一次産品が多く生産されていた。これら山貨を扱う業者は、その性質によって三つに分かれる（張1938, T29頁）。

まず、①山貨の輸出貿易に従事する「字号」である。これには、桐油の販売を行う桐油字号、羊毛や鴨毛・生漆を扱う雑貨字号、豚毛や羊皮を扱う猪鬃字号などがある。つぎに、②字号などに山貨の買い付けを仲介する業務に従事する、

---

ブームについて、軍閥政府の資金調達手段としての側面を強調する見方が主流であった（周2003など）。近年では、都市発展や産業との関わりを指摘する見方も出ている（張2003）。ただし、同業公会の機能などについては、これまであまり着目されてこなかった。なお、人民共和国初期の状況については、林（2007a）を参照のこと。

\*本稿は、りそなアジア・オセアニア財団2008年度調査研究助成による成果の一部である。

1 これまでの研究では、重慶における銀行設立

「堆棧」・「中路」・「經紀人」である。このうち堆棧は、山貨商による山貨の購買を仲介して手数料を取る業者で、最も規模が大きい。中路は、字号に替わって山貨の買い付けおよび売却を行う業者である。經紀人はこれらの業務を個人で行うものである。さらに、③製品の加工に従事するのは「洗房」・「梳房」などの業者であった(張1938, T29頁)。これらの組織は、株主が無責任を負う「合股」<sup>2</sup>か、経営者が単独で行う私企業の形態を取っており、出資者がそのまま經理を担当する場合が多かった(張1938, T30頁)。これらの業者のうち、商品買い付けのために多額の資金を必要とする字号および堆棧・中路・經紀人が、錢莊などによる商業金融を利用する主要な顧客であった。山貨は堆棧など複数の業者を経て、いったん重慶に集められた後、字号によって上海など長江下流域の大都市へ輸出されてゆく。そして下流大都市からは、綿布・反物・機械・化粧品・輸入雑貨など、「上貨」と呼ばれる商品が重慶へ輸入され、各地へ送られていった。なかでも主要な商品は、上海および漢口から「上貨商」と総称される字号が輸入する綿布であった(張1938, S4-6頁)。

ところで上述の山貨商及び上貨商は、業者の出身地別にそれぞれ異なる「幫」に属していた。この「幫」組織は、四川における秘密結社組織である哥老会と密接な関わりを持っていた<sup>3</sup>。哥老会は、とりわけ物流および商業交易の安全性と密接な関係をもっており、商業に従事する者の多くがこれに加入していた。山貨字号幫の多くは、四川以外の長江下流域諸都市に本拠を持つ業者によって構成されていた(張1938, T

23-29頁)。綿布輸入業者もまた、山貨商と同様に「幫」の組織が存在していた。各幫は、地縁的結合・人的結合を基礎として、それぞれ得意とする品目を開発・売買し、それを自らの関係の深い土地へ持ち込んで転売するという活動を行っていた。

## 2.2 重慶における伝統的金融機関

清末期の重慶には、銀号・票号・錢莊など33の伝統的金融機関が本拠をおいていた(周2003, 374-375, 380頁)。清朝の崩壊とともに、清政府の外債支払いなどと密接な関係を持っていた山西票号の勢力が衰えると、重慶では在地商人との結びつきが強い錢莊の勢力が大きく拡大することとなった。重慶の錢莊は、その全てが合股による組織形態を取っていた。資金規模は数万両～10数万両と小さく、出資者の信用と財力そのものが、経営の根本的基礎とされていた(重慶中国銀行1934, 24頁)。その組織は、經理を中心とする単純なものであり、経営に関する決定は、全て經理の管理下におかれていた。また業務については、為替交易や両替などを主としており、明確な支店制度を持たないことが特徴であった(重慶中国銀行1934, 24頁)。

中国における伝統的金融機関の特徴については、これまで①政府の援助や統制から独立し、政府の製造する貨幣とは別個の貨幣を持つ、②物的信用を重んじず、人的信用を重視する、③短期商業信用業務に偏向している(Lieu1927, pp.37-41)、④個人経営あるいは合股経営であり、資本金規模が比較的小さい(宮下1941, 12ページ)、などが指摘されている。民国初期における重慶の金融業をになっていたのは、この

2 一般に合股企業の株主は、当該企業において経営に参画し利益分配を受ける権利を有するかわりに、債務にたいする無限責任を負い、その出資額に応じて当該企業の債務を返済する責任を有する(根岸1943, 158-165ページ)。

3 四川における哥老会は、仁・義・礼・智・信の号(門)に分かれ、各地の機関部は碼頭と呼ばれた。各碼頭間には、情報の急速な伝達や他の碼頭に属する会員の保護について、密接な相

互関係があるが、機構としては、各碼頭が一応それぞれ独立の組織をなしており、哥老会全体としては、一種の分権的な連合体をなしていたとされる(西川1978, 166-167ページ)。哥老会の組織は、それ自体が表に現れることは極めて稀であるが、産業ごとに形成される「幫」は、それが表社会の記録に表れたものであるとも言えよう。

ように中国において最も一般的な伝統的金融機関であった。

### 2.3 為替取引と「申匯」

先に述べたように、四川と上海の間では、豚毛・桐油・生糸・漢方薬種・牛革・羊皮など、「山貨」と呼ばれる四川地方の特産品と、綿布・反物・機械・化粧品・輸入雑貨など、「上貨」と呼ばれる商品の取引が行われていた。山貨は通常堆棧などの仲買業者によって四川各地から重慶に集積され、これを字号などの山貨輸出業者が長江を利用して上海などの大都市へ運び売りさばいた。上海からは、上貨商が工業製品などの商品を仕入れて重慶へ運び、そこから四川各地及びチベット、雲南などへ送られていく。このように重慶は四川地方における商品の集散地として、またそれに付随する金融業の中心地として、重要な位置を占めていた。

これらの取引に際しては、売買される商品の代金決済が必要となる。ところが、当時重慶において流通していた銀元（上海との取引にさいしては滙元と呼ばれた）は、基本的に四川域内においてのみ通用するものであった。そのため、上海など外地との商取引の決済にさいして現金を直送することができず、為替を用いた取引が必要となる。その中で特に重要であったのは、上海との取引決済を名目とした「申匯」であった。中華民国が成立した1911年以来、四川と四川域外との貿易はほぼ一貫して輸入超過の状態が続いており（張1938, U1-2頁）、現銀の四川域外への流出が常態化していた。このためこの申匯には、為替手数料の他に、重慶—上海間の銀元及び申匯の需給状況に従った「申水」と呼ばれる差額が付けられることとなる。

ところでこの申匯には、1～3ヶ月の決済期限が設定され、その手数料は支払い期限が短いものは高額に、期限の長いものが低額に設定されていた。この決済期限の相違により、申匯は投機の対象となった。当時為替取引や物産取引を一手に扱っていた重慶交易所では、毎日申匯相場が立てられ、決済日時によって1～3ヶ月

の先物取引が行われていた。申匯は本来重慶—上海間の決済を目的としたものであるが、交易所における取引は、申匯を実際の決済と乖離させ、現代における外国為替取引に相当するような投機行為を生じさせることとなった。

### 2.4 通貨の転換と劃条経済

金融恐慌へとつながるもうひとつの要因は、四川内地における通貨の転換と「洋水」に関わる問題であった。四川地方では1930年代まで、複雑な通貨流通制度が展開していた<sup>4</sup>。まず、都市部を中心に、商取引や納税に用いられ最も広く流通していたのが銀元であった。中でも四川で発行された漢板大洋・川板大洋が最もその流通量が多かった。ただし、当時四川で流通していた銀元は、発行地や年代によって銀の含有量などが異なるため、各地域によって流通の範囲及び通用の仕方は様々であった。次に、農村部を中心に流通していたのが銅元である。これには、四川中部・北部・西部を中心に流通する当二百銅元（額面200文）と、南部・東部を中心に流通する当一百銅元（額面100文）及び当五十（額面50文）銅元があった。また重慶や成都など限られた地域では、銀行や軍閥政府が発行する各種紙幣及びそれに類する債権・証書が流通していた。

市場では、季節によってこれら通貨の需給状況が変化する。重慶では1年間に二度の大きな銀需要の波があった。すなわち、初夏のアヘン買い付け期及び年末の山貨買い付け期である<sup>5</sup>。買い付け商人が、各地において商品の買い付けを行う際に必要な銀元及び銅元を準備するには、季節によって変化する銀及び銅の需給状況に従って、差額を付ける必要があった。この差額が「洋水」の本来の意味である。重慶における「洋水」問題が複雑であったのは、それが現銀

4 「四川幣制概観」『四川経済月刊』第3巻第1期（1935年1月）134-137頁。

5 「重慶金融調査」『四川経済月刊』第3巻第4・5両期（1935年5月）47-48頁。

・現銅同士の交換だけでなく、後述する一種の約束手形である「劃条」の現金化にさいしても生じるためである。通常各金融機関がこの劃条を直ちに現金化することは稀であったが、これを現金化する必要が生じた場合には、その発行高と市場の現金流通量に従って「洋水」が発生することとなるのである。

当時の不安定な政治状況や、貸付先となり得る産業がまだまだ未発達な状況の下で、金融機関が集めた資金を運用するのに最も手っ取り早い方法は、上述のような状況を利用して「買空売空」(空買いと空売り)を繰り返すことであった<sup>6</sup>。こうした状況を背景として、重慶では銀行設立ブームが起こることとなる。

### 3. 重慶における銀行設立ブームと「銀行業界」の形成

#### 3.1 重慶における銀行設立ブームと同業者組織

1910年代の重慶において、銀行は聚興誠銀行<sup>7</sup>を中心に4行しか存在しなかった。しかし、1920年代以降、複雑な金融状況を背景として、続々と銀行が設立され始めた。当時設立された銀行の概要は表1の通りである。当時設立された銀行の中には、間もなく営業を停止したものも多くあったが、四川美豊銀行、重慶銀行、川塩銀行、川康殖業銀行のように、大きな銀行へと成長したものもあった。こうして、重慶の銀行業は、聚興誠銀行の一強時代から、複数の銀行がしのぎを削る競争の時代へと移行していきつつあった。

重慶で銀行業が続々と成立し、営業面でのしのぎを削るようになるとともに、銀行の同業者組織が出現することとなる。第一次世界大戦の勃発した1914年以降、北京政府は「銀行公会章程」

を制定し、銀行業の統制を試みていた<sup>8</sup>。これを受けて、銀行の増加とともに各地で同業者組織が設立されていく。中でも全国金融の中心である上海では、1918年、銀行業同業組織である上海銀行公会が設立されていた(根岸1951, 148-150頁)。重慶の銀行業同業組織は、この上海銀行公会を範として設立されることとなる。

重慶における銀行業の同業者組織の源流は、1926年ごろ成立した「聯歛会」に求められる(表2)。重慶において本格的な銀行が出現したのは、四川初の商業銀行である聚興誠銀行が営業を開始し、中国銀行が重慶に分行を設立した、1915年のことであった。当初は銀行そのものが少なかったこともあって、同業者組織が形成されることもなかった。1920年代に入ると、四川美豊銀行(1922年)、中和銀行(1922年)が設立されたため、各銀行間の連絡を密にする必要から、「聯歛会」が結成された。これは政府に別段の届け出を行わない、一種の親睦団体の体裁を取ったものであった。このような組織は、重慶の錢莊業において結成されていた「老君会」「至公会」と呼ばれる同業団体と類似したものである。これらの団体は、錢莊業者の利害調整を行うだけでなく、廟において財神の祭祀や食事会などを開く、伝統的性格を濃厚に持つものであった<sup>9</sup>。

1930年代に前後して、重慶では銀行設立ブームが起き、重慶平民銀行(1928年)、川康殖業銀行(1930年)、川塩銀行(1930年)、重慶銀行(1930年)などが相継いで設立された。これを受けて、1931年9月、国民政府の認可を受けた正式な同業者団体である、重慶市銀行公会が成立した。同会への加入条件についてははっきりしないが、前述の「銀行公会章程」では、払込資本金総額20万元以上で、設立登録から満一年が経過して

6 「奸商掉現転売 造謠提高洋水 廿一軍総金庫嚴拿究辦」『重慶商務日報』1934年9月16日。

7 同銀行については、林(2003;2005;2007b)を参照されたい。

8 「銀行公会章程(1915年8月公布)」(満鉄調査

課1931, 15-17頁)。

9 なお、これらの同業団体は、1905年ごろに錢幫公所へ、1926年には錢業公会へと改組され、錢莊業者の正式な同業団体となっていく(劉・蔡・盧・陳1964, 115-134頁)。

表1 重慶における新設銀行一覧 (1915~38年)

銀行名	設立年	備考
聚興誠銀行	1915年	
大中銀行	1918年	1922年営業停止
四川美豊銀行	1922年	元は中米合弁。1949年営業停止
中和銀行	同上	1925年営業停止。
富川儲蓄銀行	同上	同年営業停止
四川銀行	1923年	同年営業停止
重慶平民銀行	1928年	1937年、川康平民商業銀行に合併
川康殖業銀行	1930年	同上
川塩銀行	同上	1949年営業停止
重慶銀行	同上	1949年営業停止
北碚農村銀行	1931年	1949年営業停止
四川商業銀行	1932年	1937年、川康平民商業銀行に合併
四川建設銀行	1934年	
四川地方銀行	同上	1935年四川省銀行に改組。1949年中国人民銀行により接收
新業銀行	同上	
川康平民商業銀行	1937年	1949年営業停止。川康殖業・重慶平民・四川商業が合併
和成銀行	1938年	和成錢莊から改組。1951年、公私合営化

(注) 銀行名はいずれも重慶に本店をおくものである。

(資料) 張 (1938, D1-2頁), 沈 (1939, 155-211頁)。

表2 重慶における銀行業同業者組織の変遷

名称	成立年月	職別	姓名	所属	職務
聯欵会 (中国・聚興誠・中和・四川美豊)	1926年ごろ	幫董	趙資生	中和銀行	総経理
重慶市銀行業同業公会 (第一期) (中国・聚興誠・川康殖業・四川美豊・重慶市民・重慶平民・川塩)	1931年9月25日	主席	康心如	四川美豊銀行	経理
		執行委員	周宜甫	中国銀行	経理
			張茂芹	聚興誠銀行	重慶分行経理
			湯壺嶠	川康殖業銀行	経理
			張子黎	重慶平民銀行	経理
			陳麗生	川塩銀行	経理
			潘昌猷	重慶銀行	総経理
重慶市銀行業同業公会 (第二期) (中国・聚興誠・川康殖業・四川美豊・重慶市民・重慶平民・川塩)	1933年10月1日	主席	潘昌猷	重慶銀行	総経理
		執行委員	周宜甫	中国銀行	経理
			張子黎	重慶平民銀行	経理
			康心如	四川美豊銀行	経理
			任望南	聚興誠銀行	総管理处協理
			劉航琛	川康殖業銀行	総経理
			吳受彤	川塩銀行	董事長
			戴拒初		
			周季梅	川康殖業銀行	協理
重慶市銀行業同業公会 (第三期) (中国・聚興誠・四川美豊・重慶川塩・重慶・四川省・江海・四川建設・川康平民商業)	1936年	主席	吳受彤	川塩銀行	董事長
		執行委員	顧敦甫	中国銀行	襄理
			龔農膽	四川美豊銀行	経理
			連智臨	重慶銀行	襄理
			梅孝威	聚興誠銀行	副理
		候補執委	鮮伯良	江海銀行	経理
			廖問聘	四川建設銀行	襄理
			任望南	聚興誠銀行	経理
		常務委員	康心之	四川省銀行	協理

(資料) 張 (1938, D37-38頁), 重慶中国銀行 (1934, 34-42頁), 「川康平民商業銀行小史」

(『四川經濟季刊』第1巻第1期 (1943年12月) 195-198頁) より筆者作成。空欄は不詳。

いる銀行が入会資格を得るものと規定されている（第二条）。また、上海銀行公会では、正式成立後満三年が経過していること（上海以外に本店を持つ銀行については、上海支店成立後満一年以上経過していること）が条件とされている<sup>10</sup>。このため重慶でも、加盟銀行には一定の条件が課されたものと推測される。

### 3.2 重慶銀行公会の内容

銀行公会の活動内容は、主として次のようなものであった<sup>11</sup>。

①票拠交換所の設立（詳細は後述する）

②会員銀行間あるいは会員と非会員の争議を調停する

③同業者の営業状況を調査する

④金融業に有益な公共事業を実施する

公会の会員は、各加盟銀行が1～3名派遣する代表によって構成される。これには、各銀行の正副経理あるいは全権を委託された職員があげられることとなっていた。会員には、それぞれが所属する銀行の営業報告を提出すること、会費を納入することが義務とされている。また同時に、国民党に反対する言論を行わないことが加えられているが、これは上海などの状況を踏襲しているものと思われる。これら会員から選挙で9名を委員に、3名を候補委員として選出し、委員会を組織する。この中からさらに常務委員5名を互選し、この中から首席1名を選出して公会の代表とする。会費については、入会費が50元、年会費が80元（ともに単位は銀元）と規定されている。

### 3.3 委員組織の内容

現在のところ判明しているのは、第1期（1931年）から第3期（1936年）までの状況で

ある<sup>12</sup>\*<sup>13</sup>。まず、会員銀行の推移を見てゆくと、第1期では中国、聚興誠、四川美豊、川康殖業、川塩、重慶、重慶平民、重慶市民が加わっている。第2期に変化はなかったが、第3期には、四川省銀行や、江海銀行が加わっており、ここにおいて銀行公会の形が整ったといえるであろう。これらを本店の所在地で区分すると、加盟10銀行のうち、本店が重慶以外にあるものは2行（中国、江海。ともに本店は上海）であり、他は全て本店を重慶に構える銀行である。上海銀行公会では、出身別に華南・華北・華西・華東などの団体が形成され、複雑な構成をなしていた<sup>13</sup>。これに対して重慶市銀行公会の加盟銀行は、重慶か上海に限られており、比較的単純な構成であった。

また、これらを官・民の別で区分すると、国公営銀行は2行（中国、四川省）であり、他は民間銀行である。これは、中国・中央・交通などの大政府銀行が存在する上海と異なり、重慶では民間商業銀行の活動が相対的に盛んであったことによる。

以上のような特徴は、各期の委員構成にも表れている。第1期公会の主席には、四川美豊銀行の康心如が就任し、委員には会員である中国、聚興誠、川康殖業、川塩、重慶、重慶平民から1名ずつが選出されている。第2期は重慶銀行の潘昌猷が主席となっているが、執行委員に劉航琛が加わっているのが注目される。劉は川康殖業銀行総経理と川塩銀行董事を務めると同時に、重慶の軍閥劉湘が率いる国民革命軍第21軍軍部の財政局長を務める、政財界の重鎮であった。第3期は川塩銀行の呉受彤が主席に就任しているが、彼は多忙により出席できなくなった

10 「上海銀行公会章程（1924年9月改正）」第五条（満鉄調査課1931、224ページ）。

11 「重慶市銀行業同業公会章程」（張1938、X98-100頁）。

12 これ以降の状況は不明である。ただし、1940

年代以降の主立った新設銀行が、銭荘から銀行へと業務を転換させた和成銀行（呉晋航董事長）しかないことから、銀行業同業公会の組織に大きな変動はなかったものと推測される。

13 根岸（1951、148頁-150頁）。なお、四川籍の銀行で上海銀行公会に加入しているのは、聚興誠銀行のみであった。「上海銀行業同業工会会員銀行実収股本指数比較表」呉（1934、19頁）。

劉航琛の代役として登場している。このように重慶銀行公会は、重慶政財界において1920年代以降頭角を現した人物である、劉航琛・潘昌猷・康心如らを中心として運営されていくこととなる。

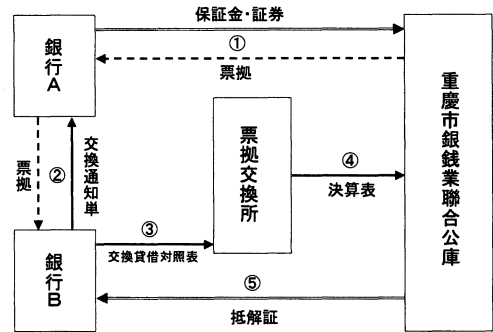
### 3.4 銀行公会の機能

それでは、重慶における銀行公会には、どのような機能があったのであろうか。

第1に、銀行営業を規定する機能が挙げられる。銀行公会には、銀行営業を規定する条項が設けられていた<sup>14</sup>。これによれば、会員銀行には市場レートの相互公会が義務づけられていた。さらに会員銀行には、現金準備を20%、保証準備を10%以上備えることが原則義務化され、手形の取り扱いに関する取り決め（手形の種類や紛失時の補償方法など）がなされていた。これらは、金融恐慌前後の上海の状況（城山1999）を踏襲したものであると考えられるが、こうした規定の明文化や統一的ルールの策定などは、これまで重慶にないものであった。

第2に、信用取引の仲介機能である。前述のように、銀行公会は票拠交換所を設けていた。この票拠交換所では、会員銀行間の現金決済を避けるために、票拠（支払手形）による帳簿上の決済を行う仕組みができていた（図1）。たとえば銀行Aが銀行Bに支払いを行う場合、まず①銀錢業聯合公庫に保証金・証券を納入し、票拠を振り出す。②銀行Aから銀行Bに票拠を送付する。銀行Bは票拠を受け取ると、銀行Aに額面などを記載した交換通知単を送付する。③銀行Bは、金額や支払い銀行などを記入した交換貸借対照表を作成し、票拠交換所へ送付する。④票拠交換所は、各銀行からの交換貸借対照表を集計して総決算表を作成し、聯合公庫へ送付する。⑤聯合公庫は、銀行Bに抵解証を送付する。こうして銀行Bは、銀行Aに対して、

図1 票拠交換所を中心とする劃条取引の概念



（資料）「重慶金融調査(一)金融業の実務」『四川経済月刊』第3巻第4・5期（1935年5月）45-46頁をもとに筆者作成。

抵解証に記載された額の貸付を行っていることになるのである。

銀錢業聯合公庫の発行する票拠には、その用途によって「公単」「保付支票」など、いくつかの種類があった。重慶では、これら銀行間の取引決済のみに用いられ、市場で流通する性質を持たない手形を、総称して「劃条」と呼んだ。銀行公会は、銀行間で交換可能な劃条を、各銀行が預託する公債や有価証券などの保証によって発行した。これは、大幅な入超により現銀不足に陥っていた市場を背景に、硬直化した信用の拡大を図るものであった。一方で、劉湘政府による紙幣・債券の乱発により、安定的な通貨の供給は行われないままであった。こうした状況は、後に金融恐慌を引き起こす要因となっていく。

第3に、新興企業の出現にかかわるものである。銀行公会が成立した1930年代初頭、四川地方では、第21軍を率いる劉湘政府が四川の統一を実現しつつあった。これと同時に劉湘政府は経済政策を立案し実施していくが、その際に重要となったのは、いわゆる「財政官吏」の任用であった<sup>15</sup>。劉湘政府は、徴税主管人員や官営事業の責任者などについて、「国内外の大学あるいは専門学校で、政治・経済・会計・銀行商

14 「重慶市銀行業同業公会会員銀行営業規定」『四川月報』第1巻第4期（1932年10月）20-29頁。

15 「二十一軍財政官吏任用暫行条例」『四川月報』第3巻第3期（1933年9月）41-44頁。

表3 重慶における新興企業役員一覧

	華西興業公司 (1932年成立) <sup>1</sup>	重慶自來水股 份有限公司 (1927年営業 開始,1937年 法人化) <sup>2</sup>	四川水泥股 份有限公司 (1935年) <sup>3</sup>	重慶電力股 份有限公司 (1935年) <sup>4</sup>	重慶証券交易所 (1932年) <sup>5</sup>	その他職務
劉航琛	常務董事	董事	常務董事	董事	発起人	川康殖業銀行董事長, 四川省銀行總經理, 21軍財政庁長
康心如	常務董事	董事	董事	董事	代理理事長	四川美豊銀行總經理
潘昌猷	董事	董事長	董事			重慶銀行總經理
呉受彤			董事長			川塩銀行董事長
楊榮三		董事	董事		理事長	聚興誠銀行主任事務員

(資料) 本表作成にあたっては、張瑾 (2003, 228-229頁) を参考にした。

1 寧 (1964, 1-31頁); 2 温・税・傳 (1964, 32-54頁); 3 寧 (1962, 55-68頁); 4 傳 (1962, 69-90頁); 5 「重慶証券交易所概況」『四川月報』第4巻第1期 (1934年1月) 51-55頁。

科などを専攻した者」を選抜して登用する方針を出した。その結果、四川出身で、中央の教育を受けたエリートが、財政を担当する官僚として任用されていく。その代表的存在は、北京大学を卒業した劉航琛である。彼は、劉湘政府の財政政策を取り仕切る人物として台頭することとなる。

こうした財政官吏たちが経済政策を立案した結果、重慶では都市化が進展すると同時に、多くの新興企業が出現した (表3)。これらの新興企業には、土木建設 (華西興業公司)、水道 (重慶自來水公司)、セメント (四川水泥公司)、電気 (重慶電力公司) などのインフラ関連企業や、重慶証券交易所のような新しい経済政策に連動する企業が含まれていた。これらの企業は、いずれも旧来の幫組織と関係が薄いことから、新たな企業を設立することで、勢力を拡大しようとする意図がかいま見える。表3を見れば、銀行公会の成員の多くが、これらの企業の役員あるいは出資者であったことがわかる。銀行公会は、新たな利権集団としての性格を併せ持っていたのである。

このように、銀行公会は、(1)加盟銀行の統一的行動をおこなう相互統括機関、(2)信用の拡大などをおこなう金融調整機関、(3)新たな利権を集約する利益集約機関、という、複合的な機能

を担う組織であった。こうした組織の出現は、伝統的金融業が多数を占めていた重慶に、「銀行業界」を出現させ、これまでの重層的な経済構造を打破するきっかけとなっていく。1930年代初頭、重慶における銀行をめぐる環境は大きく変化しつつあった。そしてその背景には、中央の制度をテコとして自らの勢力基盤拡大を図る劉湘政府と、その周辺に出現する新たな利権をめぐる銀行業者の思惑が交錯していたのである。

#### 4. 重慶金融恐慌

##### 4.1 金融恐慌の発生

1927年、南京国民政府が成立してのち、1928年6月から7月にかけて、国民政府は上海において全国経済会議、南京において全国財政会議を相継いで開催した。これらの会議において国民政府は、中央財政の確立を目指し、三大間接税 (関税・塩税・統税) の確立、雑多な国内の流通貨幣を統一するための廢兩改元の実施、政府による通貨の管理を行うための国家銀行の組織などの方針を打ち出していた。その後1929年におきた世界恐慌の影響は中国にも波及し、上海では銀の大量流出による金融恐慌が発生した (城山1999)。恐慌状態の打開のため、国民政府は財政確立のための施策を推し進め、後の幣



制改革による幣制の統一へとつながっていく。また同時に国民政府は、「票据法」(1929年10月施行)や、「銀行註冊章程」(1929年1月)、「銀行法」(1931年3月公布)など、それまで明確な規定のなかった銀行に関する法整備を進め、銀行の営業を政府の管理下におくことを目指していた。

一方重慶では、劉文輝との戦いや対共産党戦のために多額の軍事費捻出の必要に迫られていた劉湘は1929年、前述の劉航琛を招聘し、財政庁長に任じた(沈雲龍他訪問1990, 29-30頁)。劉航琛は、破綻寸前に追い込まれた軍部の財政を改善させるために、市場からの現銀調達を最重点におき、①各種税金の徴収強化、②全国に先駆けた廢兩改元の実施、③銀錢業聯合公庫の設立などによる金融業の監視、④四川地方銀行の設立と「地鈔」と呼ばれる輔幣券の発行、などの経済政策の実施を試みていった。

1934年、劉湘政府は戦費調達のため、たてづけに公債を發行<sup>16</sup>するとともに、聯合公庫より巨額の劃条を振り出し、それを各銀行で現金化し、対共産党戦の費用とした(張1938, E1頁)。この結果、市場における現金の流通量が極端に減少し、1934年中頃から1935年始めにかけて、重慶では金融恐慌が発生した。恐慌に際して、劉湘政府は現銀及び紙幣の四川域外への持ち出しを厳禁し、違反したものについてはその全額を没収する旨の命令を出した<sup>17</sup>。劉湘政府の取った事実上の通貨流通遮断措置は、瞬く間に申匯相場に影響した。1934年初頭には1上海元=1.1~1.2渝元で推移していた申水は、1934年末には1.5渝元を超えるまでに高騰した。市場は大混乱となり、上海向け為替業務は一時的に

停止される事態となった。

#### 4.2 金融恐慌の収束と四川幣制の統一化

1934年、劉湘政府は金融恐慌の収束のため、当時既に政府銀行として位置づけられていた中国銀行から国幣を借り入れ、劃条の全面回収を行った。続いて劉湘は、南京へ赴いて蒋介石と会談し、国民政府による全面的な財政支援を取り付けた。そして1934年12月、劉湘を主席、劉航琛を財政庁長とする四川省政府が成立した。

一方国民政府中央は、蒋介石=劉湘会談の後、江西省で共産党掃討戦に当たっていた中央軍事委員会委員長南昌行營を重慶へ移転し、1935年1月、重慶行營を設立させた。また同年10月、南昌行營參謀団が重慶入りし、重慶行營參謀団となった。重慶行營は、軍事委員会の重慶移設により廢止される1938年2月までの約3年間、蒋介石の意志を代表して、共産党勢力の掃討と政治の統一、軍隊の国家化実現を任務とした。この間、最も力が注がれたのは、四川における財政及び金融の整理であった。

当時国民政府は、来たるべき日中戦争に備えるべく、①いわゆる苛捐雜税の廢止や所得税の徴収などの税制度改革と、②地方財政の確立、③各種公債の整理、④幣制の改革、⑤中央銀行の設立など銀行の改組、といった財政政策を推し進めようとしていた(侯2000, 14-18頁)。これを受けて国民政府は、四川善後督弁公署による軍費の統一的支出や、「国省混合予算制度」の導入による国税と地方税区分の明確化などの施策を行なっていく。また国民政府は、四川善後公債・整理四川金融庫券の発行によって、国幣を大量に四川地域へ投入していく(周1971, 23頁)。こうして四川では、国幣によって地域貨幣などが回収され、通貨の国幣本位化が急速に進んだ。そして同年11月、国民政府の幣制改革により、四川地方では法幣を本位とすることで金融の恐慌状態が解消された。またこれと同時に、法幣發行機関である中国銀行の長江流域ネットワークが大幅に拡大した。中国銀行による長江流域為替収入は、1932年の3億7186万元

16 1934年に21軍軍部が發行した公債は以下の通り。3期塩稅庫券(300万元, 1934年1月~)、田賦公債(1500万元, 1934年3月~)、統稅庫券(300万元, 1934年8月~)。なお1935年の段階で、同軍部が發行した公債の未償還額は、4400万元に上っていたという(張1938, C154頁)。

17 「上游輪所運現金 運到渝時須換川鈔」『新蜀報』1934年9月9日。

から、1936年には8億3733万元へと倍増していた（中国銀行行史編輯委員会1995、242頁）。こうした政府系大銀行のネットワーク拡大は、法幣の四川における実際の市場流通を更に促してゆくこととなる。

以上のように、四川地方では金融恐慌の収束へ向けた動きを契機として、それまでの重層的な幣制が法幣のもとに統一化されていく。また、税収の区分や軍費の国家支給などにより、軍閥の勢力が減ぜられていく。これらの施策は、四川地方における財政及び幣制の国家化を急速に進展させ、のちの「大後方」形成の基礎となっていくのである。

#### 4.3 軍閥政府と地方民間銀行の関係変化

劉湘と国民政府が関係を深めていく中で、地方民間銀行と劉湘政府の関係はどのように変化したのであろうか。ここでその一端を表す、聚興誠銀行の銀地金交易事件の事例を見ていきたい。

事の発端は、重慶において金融恐慌が起こった1934年、聚興誠銀行が下流域の宜昌及び沙市から現銀40万元を重慶及び万県へ輸送する旨を、劉湘政府に申請し、その許可を取りつけたことにある<sup>18</sup>。聚興誠銀行はこれを「市場における銀不足の解消」のためとしていた。しかし、実は聚興誠銀行の銀輸送はこれだけに止まっていなかった。1934年4月30日に、国民政府財政部が聚興誠銀行総管理処に送付した訓令<sup>19</sup>\*<sup>20</sup>によれば、財政部には次のような訴えが来ていた。すなわち、「重慶市全体公民」及び万県商人牟維鑫が、「重慶聚興誠銀行經理楊榮三は政府を欺き、上海にて現銀を購入し四川へ送り、悪貨を鑄造しようとして」おり、その額は「銀錠200万（両）」に達している、というのである。ここで

財政部は、「廢兩以後、一切の交易において銀兩を使用してはなら」ず、「あらゆる銀本位幣は、全て上海造幣廠により統一的に鑄造され」るはずであることを指摘し、嚴重な処罰を示唆した。これに対して、聚興誠銀行は1934年5月14日の書簡<sup>20</sup>で、この訴えが全くの濡れ衣であると返答した。この強気な返答の背景には、銀輸送が劉湘政府と深い関係を持っていたことがあると思われる。

一方同年6月5日、劉湘政府は財政部長孔祥熙から、「劉湘政府が勝手に銀を重慶へ運び、5月21日から品位の低い銀幣を鑄造していることは、中央の法令に抵触しているため即刻停止せよ」との命令を受けている（周開慶編著1974年、541頁）。程なく重慶では、聚興誠銀行が120万元を重慶へ輸送し、利益を得ていたとする報道がなされた<sup>21</sup>。報道により聚興誠銀行の現銀輸送が衆知のものとなった6月に前後して、財政部は同事件についての調査を行い、約2ヶ月後の8月1日に再び訓令を発した<sup>22</sup>。この中で財政部は、聚興誠銀行が4月10日と5月26日に、相前後して義華洋行なる組織に銀182万9622元3角2分を支払っていることを明らかにした。また、この銀が重慶に到着してから重慶の申匯相場が大きく上昇していることを指摘した。その上で訓令は、以後このようなことを行った場合、営業停止にすることを言明したのである。

この事件の発端となっている銀地金取引は、為替取引技術の一環であると考えられるが、まずこれが劉湘政府の黙認の下で、洋行の名を借りたダミー会社を介して行われていたという点が興味深い。一般に軍閥政権は、各地における諸企業・民衆を収奪するものであったとされることが多い<sup>23</sup>。ただし、聚興誠銀行と軍閥政府

18 「聚興誠銀行四十万来川」『新蜀報』1934年5月29日。

19 財政部錢幣司訓令錢字第4572号（財政部→聚興誠銀行、1934年4月30日）「制止聚興誠銀行私擅裝運銀兩入川」財政部錢幣司檔案（257-620、以下同じ）。

20 上海聚興誠銀行→財政部錢幣司、1934年5月14日、財政部錢幣司檔案。

21 「川中金融過枯竭 聚行發表運銀經過」『新蜀報』1934年6月12日。

22 財政部錢幣司訓令錢字第7037号（財政部→聚興誠銀行、1934年8月1日）財政部錢幣司檔案。

23 たとえば波多野（1973）。

の関係は、それだけにとどまらない、いわば協力関係ともいえる関係を取り結んでいたということが、ここからかいま見える。ただしこの事件の経緯を見ると、聚興誠銀行の行為を黙認していた劉湘政府が、一転してこれを禁じていた国民政府側につき、聚興誠銀行が叱責を受けるという結果となっている。この事件は地方における軍事勢力と地方民間銀行の協力関係が、国民政府という外部勢力の介在によって崩れていったことも、明らかにしているのである。

### 5. おわりに

1930年代までの重慶では、複雑な産業取引構造や通貨制度など、重層的な社会経済構造が展開していた。同時期に台頭した地方軍事勢力は、中央の制度をテコとして、自らの勢力基盤拡大を図ろうとした。そして、こうした新たな勢力の周辺には、それまでなかった新たな利権が生じていった。重慶における銀行設立ブームと銀行業界の形成は、まさにこうした状況を背景に生じたものであった。これらの状況は、自律的活動を志向する地方の秩序が、国家を背景とする広域的秩序に取り込まれていく過程を、如実に示していると言えるであろう。

重慶ではこれ以降、日中戦争や社会主義化など、さらなる転機を迎えることとなる。そのようななかで、1930年代に形成された利権をめぐる関係は、どのように変化したのであろうか。こうした問題については、今後の課題としたい。

### 引用文献

#### 〔日本語文献〕

- 波多野善大 (1973) 『近代中国軍閥の研究』河出書房新社。
- 林幸司 (2003) 「『解放』後の重慶における私営企業の接收過程：楊家、聚興誠銀行、中国共産党」『アジア経済』第44巻第12号。
- (2005) 「日中戦後の民間銀行：重慶聚興誠銀行：1945～1949」『一橋論叢』第134巻第2号。
- (2007a) 「『解放』後の重慶における工商業団体の設立過程：重慶市工商業聯合会籌備委員会を中心に」『アジア研究』第53巻第2号。

- (2007b) 「国民政府の大後方建設と地方民間銀行 (1935～1945)」『現代中国』第81号。
- 満鉄調査課 (1931) 『支那銀行関係規定集』大連：南満州鉄道株式会社。
- 宮下忠雄 (1941) 『支那銀行制度論』叡松堂書店。
- 根岸佶 (1943) 『商事に関する調査報告書：合股の研究』東亜研究所。
- (1951) 『上海のギルド』日本評論社。
- 西川正夫 (1978) 「辛亥革命と民衆運動：四川保路運動と哥老会」(野沢豊・田中正俊(編)『辛亥革命 (講座中国近現代史 第3巻)』東京大学出版会。
- 城山智子 (1999) 「上海金融恐慌 (1934～1935) に関する一考察：国際・国内市場連関と市場・政府関係の視角から」『東洋史研究』第58巻第2号。
- 〔中国語文献〕
- 重慶中国銀行 (1934) 『重慶経済概況 (民国十一年至二十年)』同行。
- 傅友周 (1962) 「解放前の重慶電力公司」『重慶工商史料選輯 第一輯』中国民主建国会重慶市委員会・重慶市工商業聯合会。
- 侯坤宏 (2000) 『抗戦时期的中央財政与地方財政』台北新店：国史館。
- 劉聞非・蔡鶴年・盧瀾康・陳德恕 (1964) 「重慶錢幫公所的由来」『重慶工商史料選輯 第五輯』中国民主建国会重慶市委員会・重慶市工商業聯合会。
- 寧芷邨 (1962) 「回憶四川水泥廠」『重慶工商史料選輯 第一輯』中国民主建国会重慶市委員会・重慶市工商業聯合会。
- (1964) 「華西興業公司的演变」『重慶工商史料選輯 第四輯』中国民主建国会重慶市委員会・重慶市工商業聯合会。
- 四川美豊銀行経済研究室 (1943) 「四川美豊銀行二十年来概況」『四川經濟季刊』第1巻第1期。
- 沈雷春 (編) (1939) 『中国金融年鑑 民国二十八年版』中国金融經濟史料叢編第一輯、台北：文海出版社。
- 沈雲龍他訪問、張朋園他記録 (1990) 『劉航琛先生訪問記録』中央研究院近代史研究所口述歴史叢書 (22)、台北：中央研究院近代史研究所。
- 温少鶴・税西恒・傅友周 「重慶自來水事業的興建和經營」『重慶工商史料選輯 第四輯』中国民主建国会重慶市委員会・重慶市工商業聯合会。
- 吳承禧 (1934) 『中国的銀行』上海：商務印書館。
- 張瑾 (2003) 『權力、衝突与变革：1926-1937年

重慶城市現代化研究』重慶出版社。

張肖梅（1938）『四川經濟參考資料』上海：中国国民經濟研究所。

中国銀行行史編輯委員会（編）（1995）『中国銀行行史（1912～1949）』北京：中国金融出版社。

周開慶（編著）（1971）『民国川事紀要（中華民國二十六年至三十九年）』台北新店：四川文献研究社。

一（編著）（1974）『民国川事紀要（中華民國紀元前一年至二十五年）』台北新店：四川文献

研究社。

周勇（主編）（2003）『重慶通史 第一卷古代史 第二卷近代史（上）』重慶出版社。

[英語文献]

Lieu, D. K. (1927) *China's Industries and Finance*, Peking: The Chinese Government Bureau of Economic Information.

(はやし こうじ・

一橋大学經濟研究所COE研究員)

## Banks and Banker's Association in the 1930s Chongqing, Sichuan China

Koji HAYASHI (Hitotsubashi University)

Key Words: Banks, Bankers Association, Financial Crisis

JEL Classification Numbers: G21, N11

This paper focuses on the transition of regional economic system by examining the case of Banks and Banker's Association in the 1930s Chongqing, Sichuan China.

Since the era of Qing dynasty, Chongqing was one of the most important financial and commercial cities in southwest China. In the early 19th century, the indigenous banks (Qianzhuang) and trading merchants (Shanghao or Zihao) were engaged in financial transactions and conversion. The 1930s was the turning point of the Chongqing economy. Politically, the regional rule by warlords was incorporated into the system of the Nanjing National Government. Economically, the regional and complex system of currency circulation was being integrated into the national currency system. At that time, many "Modern Banks" that learned from western "joint stock limited banks" were established in Chongqing, and at the same time, the Chongqing Banker's Association (CBA) was founded. The CBA had the function to unite the banking business and to create new concessions. By using CBA, the modern entrepreneurs increased their influence, and thereby, regional autonomous economic system was changed into the national heteronymous economic system.